

## 調査研究（研修）視察報告書

報告者：山崎 憲伸

視 察 日	平成27年2月19日（木）
視 察 内 容	大東市：障がい者のクラウン活動について
視 察 者	山崎 憲伸
<p>社会福祉法人かがやき神戸の障がい者クラウングループ「土曜日の天使たち」の活動を大東市の「第5回大東市障害者アート展」にて視察し指導者、白井博之さんにお話を伺った。</p>	
<p>社会福祉法人かがやき神戸「ぐりいと」の概要</p>	
<p>神戸市にある就労継続支援事業B型 社会福祉法人かがやき神戸「ぐりいと」は平成20年4月にクラウン（道化師）活動を中心としてスタートした事業所である。クラウンを通しての日常生活能力・コミュニケーション能力の向上を図ったり、自主製品制作、地域自治会館の清掃などを行っており、これらの活動を通じて協調性や持続性、利用者の社会参加を培うことを目的としている。</p>	
<p>クラウン活動</p>	
<p>2006年障害者自立支援法導入をきっかけに、かがやき神戸のクラウン活動が始まった。大東市在住のタップ・エンターティナー白井博之さんの指導のもとで前向きに元気になれることを目的に障害のある人たちで、クラウンチーム「土曜日の天使たち」を結成した。2008年には、障がいのある人の仕事として活動をはじめ、様々な場所で年35回ほどの公演をしている。</p>	
<p>クラウンの効能</p>	
<p>障がいのある人たちには、苦手なことがたくさんある。話をするのが難しかったり、相手が何をしたいのかをくみ取ることが苦手だったり、コミュニケーションが不得手な人もいる。また、動きがスムーズでなかったりもする。そういった障がい者にとってクラウンは目で見て体験する、とても分かりやすい取り組みである。クラウンとは道化師のことで、多くの方は「ピエロ」のことと思うようであるが、ピエロはクラウンの中のひとつのキャラクターである。クラウンの大きな特色は、クラウン一人一人がピエロと同じように一つのキャラクターであり、11人のクラウンがいれば11人のキャラクターがある。クラウンは各人が持つキャラクターをデフォルメ（強調）したものであり、障がい者</p>	



の障がいも一つのデフォルメされたキャラクターとして考えられ、そのキャラクターそのものがクラウンとなり得る。

障がい者にとってのクラウンとは、役を演じるのではなく、ありのままの自分を見せることであり、背伸びをすることもカッコつけることもなく、その人の中にあるそのままをキャラクターとして活かすことができる仕事である。

障がいの重い軽いは問題ではなく、それぞれの人が持っている個性や面白さをどのように活かすかによりクラウンとして十分存在感を発揮することができる。



### <感想・岡崎市への反映>

大東市の障害者アート展のセレモニーに出演した「土曜日の天使たち」のメンバーは、確かにその強烈な個性を発揮し、クラウンになりきっていたと感じた。

活動当初は、メンバーの親御さんからは、自分の子どもを見世物にするなんてといった不安の声もあったようだが、みんな一生懸命頑張って輝いている姿と、何事にも意欲的になって自信を持ってきた子供をみて、不安も払拭されたようである。

クラウンは、障がい者にとって新たな可能性があると感じたので、岡崎市の社会福祉法人でも導入の検討をする価値はあると考える。

また、大東市では、生涯学習に白井博之さんが講師のクラウン講座があり、クラウンは別の自分になれると大変な人気講座となっているそうである。

クラウンは障がい者にとっては、自分をそのまま表現でき、逆に健常者にとっては別の自分を演出できるという効果がある。

岡崎市でもクラウン養成講座などを取り入れることも面白い試みであると考えます。